

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |                                  |    |         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|----|---------|
| 京都大学                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 博士(文学)                           | 氏名 | 田 中 智 子 |
| 論文題目                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 近代日本高等教育体制の黎明<br>—— 交錯する地域と国と宣教界 |    |         |
| <p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、近代日本における地域の高等教育体制の形成過程を、医学や洋学一般教育の場の成立事例研究を通して解明しようとした研究である。</p> <p>まず序章において、課題と方法が示される。これまでの高等教育史研究を牽引してきた諸学校の年史編纂事業が、縦割りの学校史しか描けていなかったと指摘し、1870年代初頭から1890年代初頭までの地域の教育体制の展開過程を、府県・文部省・民間勢力という三者の相互関係史として捉え、「地域史としての高等教育史」研究を目指す。そして、①民間勢力に対抗的な「公権力」として一括されがちであった国と府県とを峻別し、各府県独自の動きを明らかにすること、②民間勢力として、宣教師の語学力や医学知識、洋学一般に関わる基礎的教養を伝道手段に用いることのできたキリスト教界に着目すること、の二点を方法上の特徴に挙げる。府県はキリスト教勢力の教育上の能力を管下教育の実現のために生かそうとし、ここに両者の協同関係が生まれるとする。</p> <p>キリスト教界の中でも、来日宣教団中、最も組織的・積極的に教育活動を繰り広げたとされるアメリカン・ボード(1810年創立、本部ボストン)、およびその活動の中で創設に至る同志社という勢力に焦点が当てられる。アメリカン・ボードの活動の中心地であり、かつ文部省が一貫してナンバー2の官立学校設置地と目し、やがて高等学校の設置を計画、各府県との関わりが生じた地でもあることから、京阪神一円の府県(岡山を含む)が主な分析対象地とされる。史料としては、英文宣教師文書・府県公文書・府県会議事録・各地方紙が活用される。</p> <p>第Ⅰ部「キリスト教勢力の出現 —— 地域史としての宣教史」(全5章)では、新たに神戸に上陸したアメリカン・ボード宣教師の力を各府県がそれぞれに利用し、管下教育、特に医学教育の実現を図っていく過程が考察される。具体的には、病院や医学校という近代的医療施設が作り上げられていく時期において、神戸・岡山・京都の順に拠点を移し活動したJ・C・ベリー (John Cutting Berry) の足跡を追うことで、この課題に迫っている。</p> <p>第一章「神戸における近代医療の揺籃と宣教師ベリー来港」は、ベリーの来神の意味を、地域医療の展開上に位置づけたものである。まず歴史的前提として、医療をめぐる兵庫県と外国人居留民双方の構想と駆け引きの実態が明らかにされる。兵庫県は西洋医学の導入を図り兵庫県病院を設立するが、居留民はこの病院に満足できず、高度な医療の実現を求め、国際病院を別個に設置、両者は決別する。そこに登場する第</p> |                                  |    |         |

三の勢力ベリーが、中央政府に先がけて地域医療の充実を志す神田孝平県令の裁量の下、神戸病院（兵庫県病院）の顧問役に収まり、伝道も黙認され、県と良好な関係を築く経緯を考察している。

第二章「医療宣教師ベリーと兵庫・飾磨県の行政・社会」では、神戸を拠点とするベリーの活動実態を、兵庫・飾磨両県政との関係から扱っている。ベリーの「伝道診療所」設置活動が拡大する具体相を明らかにし、医制による中央の政策が及ぶなかでの両県の対応を検討した。前章で述べた兵庫県と異なり、飾磨県森岡昌純権令は、ベリーと地元医師らが興した会社病院を公立病院に吸収してしまう。その後両県が統合し、ベリーが神戸病院での居場所も失うことを明らかにし、医療宣教師にとっては、漢方医や旧宗教という「伝統」より、むしろ国の医療政策という「異なる近代」が競合相手であったと結論づける。

第三章「岡山県における医学・洋学教育体制の形成とアメリカン・ボード」では、岡山県とキリスト教勢力との親和関係、すなわちベリーら宣教師が、公立病院および私立池田学校に雇用されていく経緯を、藩制末期以来の県下医学・洋学教育体制、あるいは地域有力者層や県令高崎五六の動きという観点から考察している。さらに、岡山県と宣教師との連携が、東大卒業生の県医学校への流入と民権運動の展開という1880年代前半の状況下に崩壊していく過程も検討される。最後に、教育に関わる主体として、旧藩医層・宣教師・地方長官・東大卒業生・県令・地域有力者、という各勢力を列挙し、医学教育と洋学教育における勢力構造の違いを論じ、第一章以降全体を地域比較史的に論じている。

第四章「京都府下の医学教育態勢と新島襄の医学校設立構想」は、京都府の医学教育政策史という視角から新島襄の医学校構想を検討するものである。1882年の京都府会は府医学校廃止を可決するが、その背後には、民力休養を旨とし、地元の私立医学校と手を組んだ新島に府の医学校を引き継がせようという民権派議員らの判断があった。知事北垣国道の原案執行によりこの目論見は実現しなかったが、新島の医学校計画は、岡山での経験を経たベリーの参画を得て、府とも連携する「京都民立医学社」構想として新展開することを明らかにしている。

第五章「大阪官立学校とキリスト教」は、1869年以来大阪に存在した官立学校（第三高等学校前身校）とキリスト教との良好な関係を指摘し、その背景を考察する。在阪のアメリカン・ボード宣教師や、日本人信徒の活動を明らかにし、学内のクリスチャン教師、平信徒の外国人教員、留学体験を有する学校長それぞれの、親キリスト教的な意識や行動を検討する。生徒による浪華基督青年会結成をピークとし、官立中学校への改組がキリスト教との関係が分断されていく画期となったと捉える。また大阪では、内務官僚率いる府に代わり、文部官僚率いる当該官立学校がキリスト教伝道進展の環境を準備したと捉えられることとともに、この官立学校と府政との間にはいまだ密接な関係は生じていないことを指摘し、第Ⅱ部への導入としている。

第Ⅱ部「国の学校の登場——地域史としての官立学校史」(全5章)は、1880年代後半となり、文部省が設置を計画し主導する学校が、性格のつかみづらい新奇な存在として地域に現れ、各府県と関わっていく背景と過程とを分析する。

第六章「第三高等中学校設置問題再考——京都府における「官立学校」の成立」は、中学校令による高等中学校制度の特質を、文部大臣管轄でありながら、運営費用を地方税から支弁させる発想を有しており、設置府県に初期費用を支出させたことにあったとして議論を進める。緊縮財政下の兵庫・大阪・京都各府県の教育政策をふまえ、京都府会が設置費用支弁を決定し、高等中学校設置箇所となる顛末、および各府県の反対により、地方税による高等中学校運営費用支弁という文部省の初期構想が挫折する経緯を明らかにする。そして、高等中学校設置が求められたのは、地域振興というより、管下教育体制再編への期待からであるとの見方を提示している。

第七章「高等中学校医学部時代の到来——岡山県における「官立学校」の成立」は、第三高等中学校医学部が分科として岡山に開設された経緯を分析する。設置区域内各府県における医学校の実態、藩制期以来の岡山の医学・洋学教育体制、岡山での教育改革案や高等中学校設置案の存在と特質を明らかにし、医学部設置決定に至る県当局や県会の動向、県の経済的負担を検討する。さらに、高等中学校設立後の医学教育体制の広域的再編過程を、兵庫・京都・大阪の状況を含めて考察する。その上で、高等中学校は当初から「官立学校」だったとは定義できないこと、地域による「誘致」ではなく、むしろ「受入」と表現しうる設置実態であったことを主張している。

次に配置されるのが、1890年代半ばにまで考察を広げた補章「官立学校誘致現象の生成と変容——京都と大阪の教育戦略」である。高等中学校、官立工業学校、高等学校大学予科、京都帝国大学医科大学、という四度の「官立学校」設置問題が当該地域に起こったと指摘してそれぞれの実態を解明し、俯瞰的考察を試みている。90年代以降を、帝国議会開設や市制発足、都市間競争意識の形成、商工業者層・学者層の台頭を背景とする本格的な「誘致」の始動期と理解し、前章までに論じた80年代の特性を逆に照射する。同時に、「官立学校」に期待する京都、自主路線を選択する大阪等々、高等教育政策の差異を地域ごとに整理し、当該テーマの都市史研究上の意義も合わせて論じている。

第八章「府県連合学校構想史試論——一八八〇年代における医学教育体制の再編」は、1880年代の高等教育史を、「府県連合学校構想」史として再構成する試みであり、第六・七章の歴史的前提を考えるものである。全国的な府県医学校の設立・改廃状況、教育分野に限らない「府県連合」会議の実態を明らかにしつつ、愛知県医学校長後藤新平や群馬県会の「府県連合学校」構想が、1882年の文部省学事諮問会を通して政策化され、1884年の学制改革案を経て1886年の中学校令に収斂していく顛末が描かれる。以上を通じ、高等中学校制度は地域に発した府県連合学校構想が実を結んだものであり、したがって文部省の一方的政策とはいえないとの見解を示している。

第九章「「官立学校」概念の輪郭——「准官立」問題と同志社」は、「官立学校」の含意の変遷を、教育法令にそくして分析し、第六章以降の実態研究との相互補完を試みるものである。学制章程において「府県立」概念を吸収した「官立」概念は、教育令下に消え、さらに徴兵令改正審議の中で、「准官立」概念が発生したことを明らかにする。さらに「准官立」の語は、「府県連合学校」構想においても使用され、やがて諸学校令が發布されると、中学校令・諸学校通則のなかに理念として埋め込まれるとの見解が示される。一方、徴兵猶予適用を求めた同志社の運動を通じ、「准官立」は私学の問題と化し、そのなかで、同志社の「准官立」化ないしは諸学校通則適用による「高等中学校」化の可能性があったことを明らかにし、諸学校令体制と私学の関係についても考察している。

終章「諸学校令下の高等教育体制再編——東華学校（＝半県半民・同志社分校）の射程」は、仙台を事例とした研究であるが、第一部・第二部双方の延長上にあり、研究全体を総括する位置づけが与えられている。キリスト教勢力と「官立学校」とが同時に入来し、県立中学校・高等中学校・私立東華学校が三つ巴となった状況を明らかにする。

東華学校は、地域の進学予備教育の充実を図る地元有力者と、東北伝道を志す新島襄やアメリカン・ボードの思惑が合致して発足した。県知事以下県吏や地元財界が運営組織を担う一方、新島が校長、宣教師が教師を務め、キリスト教教育が容認される私立学校であり、「半官半民」の「同志社分校」とも称された。このような設置経緯と運営形態、および新設の第二高等中学校と東華学校に代替的役割を求め、宮城県が県中学校を廃止するに至る経緯と東華学校廃校に至る経緯が分析される。そして、東華学校は、全国的にみられた諸学校通則適用による「府県管理学校」の一変型であり、諸学校令公布により活性化した地域の私学教育の好例であったと解釈し、森文政期の象徴的存在と位置づけて締めくくる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、近代日本高等教育体制の形成過程を、医学・洋学教育制度、および高等学校構想をめぐる葛藤を中心に、揺籃期たる明治前半期に焦点を当てて解明した研究である。全体は2部9章の本論と補論からなり、前後に序章と終章が配されている。

従来の高等教育制度史は、政府・文部省内の制度形成史や個別学校の沿革史といった静態的な考察にとどまりがちであり、また大学史への偏重があったと指摘できよう。本論文はそれらの研究蓄積を踏まえつつも、医学校や高等学校（後の旧制高校）といった高等教育機関が置かれる「地域」（都市・府県・府県連合体）に視点を定め、その設置・改編をめぐる論議と推移をつぶさに追う。それは、国と府県を単に「公」「官」として一枚岩と見るのではなく、各府県の個性を鮮明にし、動態的に描こうとするものである。その際起点となるのが、キリスト教宣教師による、医学・洋学教育への志向である。彼らは語学力と医学知識を生かした伝道を試み、地域＝府県は彼らを管下の教育に活用するという、両者の協同関係に注目する。

本論文の学術的意義として、第一に府県・文部省・民間勢力という三者のせめぎ合いと協同から高等教育体制の構築を論じている点である。すなわち、近代国家成立期の教育政策がトップダウンとその受容という構図で描かれがちであった短絡的理解を脱し、府県と民間勢力のボトムアップで醸成される側面を析出している。教育史の枠にとどまらず、日本近代の地域史像の構築にも多大な寄与をなすものと言えよう。

第二の意義は、キリスト教勢力からの高等教育成立史を積極的に描いた点である。とりわけ、アメリカン・ボードと、それを母体に創設された同志社が、近代日本高等教育体制の形成において重要な役割を担ったと評価する。その具体的な軌跡の一つは、第I部で丹念に辿られる。1872年に来日した宣教師ベリーは、西洋医学を導入すべく設立された兵庫県（神戸）病院へ、地域医療の充実を志す県令の裁量によって顧問役として迎えられ、伝道も黙認され、県と良好な関係を築く(第一章)。そして医療伝道を西隣の飾磨県へも拡大していくが、同県に国の医療政策が及ぶなかでその役割を失う。彼にとっては伝統医学でなく、国の医療政策という「異なる近代」が競合相手であった(第二章)。しかしその西隣の岡山県では、ベリーらは公立病院および私立池田学校に雇用され、県と宣教師の連携が実現した。これも東大卒業生の流入と民権運動の展開により崩れていくものの(第三章)、舞台を京都府に移して新たな展開をみせる。1882年、京都府会の民権派議員は民力休養のため府医学校を廃止し、同志社の新島襄に医学校を設置させる計画を立て、新島はベリーの参画を得て府との連携を図ったのである(第四章)。

以上のように、ベリーが重ねた経験は同志社が生かすことで、高等教育体制の形成へと接続される。その様相を、本論文は鮮やかに描ききっている。そして第II部でも、同志社は「官立学校」同様の徴兵猶予適用を欲する存在（「准官立」）として再び登場し、逆に「官立」とは何であるか、文部省でさえ自覚していなかったその輪郭の所在

を認識させたことが明らかにされる(第九章)。同志社への着目は単なる一私学の研究ではなく、高等教育体制形成の全体に関わる問題として不可欠な方法であることを、本論文は説得的に示すのである。

第三の意義は、高等中学校制度の本質を「府県連合による経費支弁」に求めた点である。往々にして高等中学校は、初代文相森有礼の主導により設置が推進され、地域は教育への意欲や地元の利益を満たすものとしてそれを「誘致」した、と強調されてきた。しかし本論文はその見方を否定する。森は、府県連合の経費支弁の力量を見定めつつ、制度外の交渉を交えて同制度を離陸させようとした。府県はそれを、緊縮財政下における教育体制再編の契機として(第六章)、実体不明なものながら「受入」れたのだと主張する。第Ⅱ部ではその経緯を中学校令の条文検討から説き起こし、1880年代前半、多種の府県連合会議で案出された「府県連合学校」構想が文部省で政策化され、1886年の中学校令へと至ることを論証し、高等中学校制度は地域発の構想に由来したもので、文部省の一方的政策とは決して言えないことを明らかにした(第八章)。森は教育経費の節減を強く志向したことで知られるが、既存の府県連合という方向性を踏まえて、地域の積極的な受容と経費を引きだそうと努めた、その構図を本論文は浮かび上がらせている。そして、そこから生じた更なる展開として、終章で半官半民というべき高等教育機関・東華学校の設立事例を検討し、高等教育体制形成における同志社の影響力も再度確認する。

以上述べてきたことから推察されるように、本論文は、多様な史料への目配りとその重層的分析とが大きな特徴であり、高く評価したい。第Ⅰ部で、同志社等が所蔵する英文の宣教師文書を駆使し、国や府県のみを考察にとどまってきた先行研究を大幅に塗り替えている。第Ⅱ部でも、各地の公文書館での綿密な調査に基づいて、十分活用されてこなかった府県会議事録や地方新聞の記事を掘り起こし、風聞も飛び交うなかで模索された府県・地方議会の高等教育への取り組みを明らかにし、捉えにくい諸勢力の動向のせめぎ合いを整然と考察している。

全体を通じて叙述は穏やかで禁欲的であり、課題を明確に限定して明解な考察を展開しており、本論文の学術的水準の高さと信頼性は十分に評価できる。もっとも、その後の帝国大学を頂点とする高等教育体制の展開に、どのように接続するのかという見通しを十分には論じていないし、大学および「地域」としての東京府について直接的な分析は加えられていない。しかし、これらの課題へ向けた取り組みの方向性は本論文の随所で述べられており、近い将来、研究の射程に捉えられることは疑いないであろう。高等教育史の刷新を少し控えめに、しかし確かに宣言する本論文の価値は、いささかも減じることはないと考えられる。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として十分価値あるものと認められる。なお、2012年1月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。